【報告】

スカワナにおけるナベンNgaben、ローラスRgoras、ムンダック・ヤンMundak Yan（Hyang）について

山　川　　基

はじめに

2010年８月４日昼過ぎにスカワナを訪問すると、この段階で、すでに８月26日から３日間にわたって行われるナベンNgabenの準備が始まっていた。今回は、10のクランによる総計100人以上の死者のためのナベンだという。10のバンジャール[(1)]からなるこの村の総人口は約５千人、ナベンは５年に一度行われる葬儀の一大イヴェントであり、死者の魂が先祖霊になる過程でのワン・ステップである。先に筆者は、バユン・グデ（Bayunggede）におけるナベン、ローラス、ムンダック・ヤンについて報告した[(2)]が、バリ・アガと言われる村をいくつか訪問してみると、そこには一口では表現できない多様性が観られる。その多様性の要因は何なのか。かれらの基本的なコンセプトは果して同じなのか。細部において観られる差異はいかなる歴史的経緯の下で生じ、その差異は何を意味しているのか。果てしなく関心・興味は広がり、深化していく。炎天下の中での儀式や深夜に及ぶ寒さの中での儀式に参加し、彼らとのコミュニケーションを通してしか味わえないものを感じながら、未体験ゾーンへと入りこんでいく。書物の中とは異質の興奮がそこでは実感できるのである。

今回の儀式では、10のクランが参加するため予めその順番を決めておく必要があった。事前に決まっていたのであろう、どの段階もそれほどの混乱も無くすすんでいった。

さて、故人の霊がヤン（先祖霊となって入るサンガー）に入るまでのプロセスについて述べる前に、このスカワナにおける成人男女の死者の葬り方について若干記しておきたい。ここで敢えて「成人男女」と記したのは、歯の生える前の赤子や障害者の死、村外での突然死だけでなく、60歳未満で亡くなった人はこの儀式の正式な対象とならない。換言すれば、60歳以上で極く普通の人生を全うした人のみが先祖霊になれるということである。

ともあれ、死者は潔められた後、細長い柩に裸の状態で仰向けに、頭をクロッドの方に向け、1.5メートルの深さに埋葬されるのである。その後、死者の魂はどこへ行くのか。天国とも冥界とも、はたまた徘徊しているとも、老人に聞いても誰しもわからない、というだけである。何処に居るのやら分からない死者の魂は、一連の儀式（ナベン、ローラス、ムンダック・ヤン）を経て、最終的にはクランの寺のヤンに戻ってくるのである。今回は13人の故人が儀式の対象となっているクランを中心に、ヤンに帰って来るまでのプロセスを次のような順序でたどり、バユン・グデとの比較を視野に入れながら若干の考察をしてみたい。

Ⅰ．ナベン

（1）ナベンの初日

（2）ナベンの２日目

（3）ナベンの３日目（最終日）

Ⅱ．ローラス

Ⅲ．ムンダック・ヤン

Ⅳ．むすびにかえて

写真１

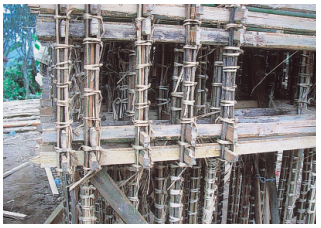


写真２

写真３

写真４

Ⅰ．ナベン

上述したように８月４日の段階で準備は始まっていた。当然作成に日数の掛かるものは早くから準備されることとなる。その代表がワダー Wadah（「入れ物」という意味）――（写真１）――である。手の込んだ（ワダーの一部分：写真２）、より大きな物を造ろうと思えば、当然日数も費用も掛かる。このワダーの作成においては、死者の魂を天国へ誘うというのが本来の目的のようだ。それだけにこの儀式において最も重視される代物である。

（1）ナベンの初日

８月26日の儀式の主たる目的は、植物で模ったものに死者の霊を迎え入れ、それを死者の住んでいた家に迎えるためのものである。会場の近いところには、12台のワダーがテントに包まれるように並べられていた（写真３）。28日の日までには完成しなければならない。したがって、ナベン初日の儀式に参加するもの、ワダーの作成に携わる者、様々である。この会場への先導役は、クルンガンKelungan（写真４）――「爆発」という意味。分かりやすく言えば、カーバイドによるガスを爆発させて音を出すスズメ脅しのようなもの――である。そして、そのすぐ後をトゥルップ Tulup（死者の魂を天国に導くためのもの）――（写真５）――を持った少年ほか多くの者が随っていく。

写真５

朝の７時前には､既にクランの第一陣は会場に来ていた。同時に２，３のクランが狭い会場に来るのでかなり混雑しているが、どのクランも会場に着くと持って来た多くの供物の傍らで、ララン Lalang という植物を使って、先ずは死者のシンボル――（これもラランという）――の作成である。70センチぐらいの細長いラランを10本ぐらい束ね

て人形（ひとがた）に手足も付け、死者が男である場合はココナッツの葉をボール状にしたものを腰のあたりに二つ付け（女性の場合は付けない）、花や一枚のダップダップの葉を折り曲げ、一束のケペン（古い中国貨幣）を添え、最後に似顔絵もどきのものをくくりつける（写真６）。そして、白布でくるまれたラランは身内の者によって、白布を切り裂いたものを紐代わりに右肩にかけ、ラランを抱きかかえる（写真７）。

写真６

写真７

その間、バリアン[3]は、何度となく聖水を供物にかけているが、なかなか同時の祈りとはならない。とは言え、ほどなくその時はやって来た（写真８）。これで死者の魂はラランに入ったことになるのである。それが終わると、参加者に対する潔めの行為である。バリアンから聖水を受け取った人が参加者をもれなく浄める。かくして、ラランを抱えた人たちすべてがクラン単位での会場となっている家に向かう。入れ替わりに次のクランのグループの登場である。

写真８

会場となっている家に戻って来た。正面玄関に「オーム・スアスティアストゥー」と書いた横断幕が張られている。すぐそばには黒豚が虫の息であった。夕方にふるまわれるのであろう。ガムラン楽団も定位置に着き、祭壇となっているところには、所狭しと供物や死者の体のシンボル化されたもの、すなわち、クンドゥッフ Kenduh だけでなくラランも奥に並べられていた（写真９）。供物の中には、生きている鳥までかごの中に入れられている。

写真９

朝早くから参加した人全員の食事がほぼ用意された。中庭を挟んで莫蓙を敷いたところと中庭に設えられた台（写真10）の上に、この日入れ替わり立ち替わりで合わせて300人ぐらいが参加したとか。しかし、女性は裏方である。

写真10

(2) ナベンの２日目

儀式２日目のこの日（27日）は、午前中から同一クランに属する親類縁者がひっきりなしにこの儀式の会場となっている家を訪問してくる。女性陣は、そのための接待掛かりである。茶菓子だけでなくコーヒー、紅茶も用意されている。朝早くから駆けつける縁者に対して朝食の用意もしなければならない、昼飯も出さねばならない、といった具合で、１日中人の出入りがある。故人の霊ともども多くの者が集まり、一体となってひと時を過ごすための時間をもつことが、２日目の目的である。

このクランでは、既述したように13人の故人がナベンの対象になっているが、13家族とは限らない。１家族での故人が２人、３人の場合も当然考えられる。また５年に１度の儀式ではあるが、直近のこの５年の間に亡くなった者だけが対象になっているわけではない。参加する家族からすれば、それなりの負担がかかってくるのである。したがって、その負担が困難であれば次回に延ばすということになる。今回このクランで必要とされた金額は２億ルピア（日本円で約200万円）だという。１億ルピアあればかなりの家が建つことを思えば、やはり大金である。式に参加した１家族当たり1000万ルピアは必要になる。大金を要するこの儀式は、所詮は金がたまらなければ参加できないというのが現実だ。今回このクランの中心となっている家での前回のナベンは大凡20年前だというのである。

（3）ナベンの最終日

朝７時半には、もうかなりの人が集まり、楽団は所定の位置についていた。儀式の参加者に茶菓子とコーヒー、朝食がふるまわれる（写真11）。ほどなく楽団の演奏が始まった。しばらくしてメイン会場へと足を運ぶ。どこに行っても外国人は筆者一人である。皆からの視線を常に感じながら、12台のワダーの前に来ると数台には梯子が架けられている（写真12）。何のための梯子か。初日の儀式でラランに死者の魂が入り家に持ち込まれたが、風呂敷に包まれたラランをワダーの最上部の、まさに入れ物に収めるためのものである。既に若干の布などが収められているワダーもある。他方ワダーのクロッドの側で、バリアンが儀式を行っている（写真13）。それはワダーを浄める為の儀式であった。

写真11

写真12

写真13

写真14

その場からメイン会場へ。供物を運ぶ者あり、柩を担ぐ者（写真14）あり、手ぶらで行く者は小さい子どもぐらいである。９時過ぎの段階で、会場での準備は未だほとんどできていない。

先ず最初の段階でなすべきことは、クランごとに指定された場所で、今回の対象となっている死者の数だけ、墓穴（柩の入る大きさで、大凡縦横深さは50センチ×80センチ×50センチ）を掘るという作業である。だが、その前に墓穴のカジャの方向20センチぐらいのところに茶碗１杯分の白米（ケペンが11枚含まれている）をうつし、茶碗を伏せておく（写真15）。これは、今回の儀式においてこの場所を買ったという行為であり、その後で墓穴を掘る作

写真15

写真16

業が始まるのであった（写真16）。ただ、故人が埋葬された場所の上で、必ずしも身内の者が儀式をするというわけではない。つまり、チャンディー・ダサのブグブグ村やブグブグの北に位置するアサックAsakで見た時のように、掘り出した人骨や木で拵えた人形（ひとがた）のものを柩に入れ、ワダーともども燃やすという方式は採っていない（ブグブグ村のすべてがそうだという訳ではない）。人骨は全く出てこないのである。なぜなら、既述したように死者は地中1.5メートルの深さまで掘って埋葬するからである。

写真17

次から次へと運ばれてくる供物は、一言でいえば、この世で食べられる最高のものを用意し、最高の衣類（サルーンや下着、女性の場合はブラジャーに至るまで）の新品が用意される。その他、ランプのシンボル化されたもの（写真17）、魂を異界へと誘う鳥（写真18）、その他ありとあらゆるものを死者の魂ともども、異界（天国か冥界か）へ持って行かせようとする。こうしたものの他に注目されるべきものが持ち込まれた。サンガー・スリヤー Sangah Sriya（太陽神）――（写真19）――である。これは各クランのカウィタンにしかないものである。しかもカウィタンの正面に設置されているものだ。その代用品が持ち込まれたということになる。何のために持ち込まれたのか。エリアーデ流の捉え方をすれば、これは至高存在者としての太陽神ではなく、「霊魂を冥界の中に案内し、翌日、日光とともに霊魂を光明に導」き、併せて「加入儀礼をおこなう秘儀祭祀（ヒエロ ファニー）というアンビヴァレントな役割」をはたすシンボルのようなものである[(4)]。

写真18

写真19

ほどなくワダーに先行してクンドゥッフ（所によってはアドゥガンという）――既婚、未婚に拘わらず、故人が60歳以上でないとこれは造らない――が運ばれてきた（写真20）。ランが人形（ひとがた）をした魂の居場所であるのに対し、クンドゥッフは死者の肉体を象徴するものである。梯子や発砲スチロールに書かれた看板ごときものも持ち込まれた。

最初のワダーが墓地の入り口に到着した。正にワダーの先導役として、少年（故人の孫ないしはひ孫）が10メートル以上の、切り裂かれた布をロープ状にしたものを持ち、

写真20

写真21

竹で組まれた枠の上では２人の演奏者（写真21）。50人以上の者が400～500メートルの距離を運んできたのである。１分もしない内に次のワダーの到着である。ただし、演奏者が載っているのは、最初の一台だけである。２台目のワダーの後に楽団が続く（写真22）。最初のワダーが墓地の一番クロッド側に置かれると、梯子が架けられた。ワダーの一番上の収納場所からラランをくるんだものが下の者に手渡される（写真23）。その時に合わせて、鶏が空高く２，３度放り投げられる（写真24）。正に「魂よ、自由に羽ばたいて行け」というわけだ。ということは、この段階でラランは、魂の抜け殻状態になり、ただ単なる死者の人形でしかない[5]。風呂敷に包まれたラランは、ひとまず竹で編んだ莫蓙の上に置かれる（写真25）。スカワナ出身者でクタやデンバサールで仕事をしている人や学生なども駆けつけるため、大群衆となる。そんな中を、次から次へとワダーは到着し（写真26）、同様のことが行われるのであった。

写真22

写真23

そして、ワダーから降ろされたラランの紐が解かれ、そこに米やチマキ状のもの（ケペンが入っている）が置かれ（写真27）、サルーン、帯、下着、100枚位のケペン、バスタオルその他のものが積み重ねられ、聖水で浄められるのであった。再び白い布で包まれ柩の中に収められ（写真28）、さらにその上に数枚の布が置かれ、蓋が閉められた。

次の段階では、柩をより大きな布でくるみ、墓穴に収めなければならない。柩の中に収まりきれなかった布などが柩の上に置かれ、そこでまた１万ルピアの札などが置かれ、土がかけられていく。その土の上に網状に組まれた竹が左右からもたれるように組まれ（写真29）――風葬で有名なトゥルニャンやブグブグで同様の形式が見られる――、中にこれまた若干

写真24

写真25

写真26

写真27

写真28

写真29

の供物が置かれると、その前には竹製の莫蓙の上に持参した大量の供物が並べられる。油で揚げた豚の頭から牛の生肉に至るまで（写真30）、まさにありとあらゆるものが供えられるのであった。午後３時前後からバリアンを囲むようにしてクラン単位で潔めと祈りが捧げられる（写真31）。

写真30

写真31

一通りの飾り付けが済み、バリアンに浄めてもらった家族の中には帰途に就くものもあり、会場から次第に人の数は減少していった。それでもまだ1000人以上は残っていただろう。３時50分、２番目にきたワダーに火がつけられた。すぐさま最初のワダーにも。必ずしも順番通りではないが、ほぼこの墓地に来た順にしたがって次から次へと火がつけられていく（写真32）。あちこちで「パーン、パーン」と竹の中の空気が膨張して割れる音がひっきりなしに聞こえる。４時過ぎには最後のワダー以外すべて崩れていた（写真33）。そして、４時20分には、最後のものも、ついに倒れてしまったのである。

写真32

写真33

Ⅱ．ローラス

９日はローラスである。その３日後のムンダック・ヤン。やはり順序はバユン・グデと同じだ。だがそれぞれの儀式にかける日数ほか幾分違いが見られる。バユン・グデでの順序は以下の通りであった。

ナベンNgaben ―（12日後）ローラスNgroras ―（３日後）ムンダック･ヤン Mendak Hyang（Yan）

しかし、スカワナでは、ナベンが３日間、その最後の日から12日後にローラス、そしてその３日後にムンダック･ヤンであるが、10のクランのうちローラスガ終わってから翌日、翌々日にムンダック・ヤンを行い、当日行ったのは３つのクランでしかなかった。実は、この他にいくつかの儀式が組み込まれていることが後で判った。

彼らへのインタヴューで明らかになったことは、以下の通りである。すなわち、ローラスの前日に儀式が行われた。ローラスという儀式の流れからいえば、規模としては大きくはないが、儀式の連関という点を考慮に入れるならば、重要な儀式と言わざるを得ない。その儀式は、８日の夕方６時ころより行われた。その目的は、クンドゥッフ――故人の体をシンボル化したもの――をもって墓に行き、ナベンにおいて自由にされた魂が再び入って来る、

写真34

写真35

いわゆる入魂の儀式なのである。その後、13のクンドゥッフは台所の２畳ばかりのところに置かれ（写真34）、その横のほうにバクティ・トゥトゥックBakti Teteg（写真35）が置かれた。バクティ・トゥトゥックとは死者の魂がより一層強くなるように祈念して置かれたものだという。

ナベンの初日に故人の霊は、一旦はクランの家に戻ってきた。それが３日目の儀式は、冥界へといくプロセスにおいてワダーに置かれ、それが会場で出される時は、鳥に天国へ運んでもらい、言わば魂の抜け殻と化したラランは柩の中に収められる。したがって、改めて死者の肉体のシンボルであるクンドゥッフに魂を呼び戻す、というわけだ。台所に鎮座しているクンドゥッフは、こうした経緯のもとで置かれているのである。

写真36

さて、ローラスであるが、これは各クランの中心になっている家で死者の霊ともども過ごす１日だということである。クランの参加者はナベンの時ほどではない。中庭に用意された台は半分になっていた（写真36）。

写真37

しかし、この日は、併せてナベンで穢れた体を浄化する日でもあった。ワダーの先導役を務めた少年は、白装束で登場だ（写真37）。父親が同伴しバリアンに浄めてもらう。傍には白いアヒルが60歳ぐらいの女性に抱えられて控えている。13人の故人の魂の入ったクンドゥッフの潔めのために居たのである。男のクンドゥッフにはクリスが挿され、女のクンドゥッフにはカンザシが挿されている。ココナッツの柄杓に入れられた聖水が漏斗状の竹かごからクンドゥッフに掛けられる（写真38）前に、バリアンはカンザシの上部の円形の中にクンドゥッフの上に飾られていた細長い植物を通し、ハサミで切る。さらにアヒルの毛をカンザシの上部の円形の中をくぐらせて毛をつまみ、それを少しハサミで切り取るのであった。

写真38

どのような意味があるのか。それは儀式の終わりを意味していたのである。

写真39

13のクンドゥッフに同様のことが行われた後、クンドゥッフは上着を着せられ、祭壇の正面に傘や供物とともに置かれた（写真39）。そして一族がそろったところで、改めてバリアンに依る潔めの儀式である（写真40）。夕方6時20分であった。

写真40

この儀式が終わって食事である。ほぼ食事を済ませ、ひと段落したところにクバヤンをはじめ村のお歴々11人がやって来た(写真41)。１０のクランをすべて今夜中に回るとのこと。40分ばかり食事と談笑。これといって何をするでもない。しかし、村落の宗教上の長、宗教関係者および行政上の長がやって来たことは、この儀式が村落にとって如何に大きなイヴェントであるかが推察されよう。お歴々が次のクランの会場に向かったのは９時半であった。

写真41

写真42

そしてこの後、故人の子供、孫などがクンドゥッフを抱え、また他の者は供物を頭上に載せ、この家から約６，７分の所にある墓地まで移動である。着いた時、すでに前のクランが陣取って儀式の最中であった。このグループよりクロッドの側に竹製の莫蓙を敷き供物を並べる。バリアンの横にはクンドゥッフを持った人たちが並んで座り（写真42)、儀式が始まるのであった。この儀式は、再び故人の霊を異界へと送る儀式だというのである。故人の体のシンボルでもあったクンドゥッフから金属などが取り除かれ、この円筒形のものは家に持って帰られることになるが、その他の供物などはその場所に捨てられたままである（写真43)。

写真43

Ⅲ．ムンダック・ヤン

ムンダック・ヤンは、ローラスの晩に異界に行った魂を改めて迎えに行くための儀式だ。ところが、ムンダック・ヤンに行く前日にも、彼らは、今度はクラン単位でなく、各家族単位で家族のクムランに明日魂を迎えに行ってくるからと、小さな報告のような儀式をしたとのことである。

ムンダック・ヤンの時に行く順序は以下の通りである。

写真44

１．海岸Segara

２．ゴア・ラワー寺院Goa Lawah（写真44）

３．ブサキBesaki

（1）Dalem Puri（写真45)、(2）Goa Rajar

（3）Pura Catur Lawa Ratu Pasek（写真46）他、

最後の Pura Puputan（puputがおわりという意味）――（写真47）――まで約10の寺。

４．Penyurisan

５．Bale Agung

６．クランの寺

写真45

写真46

写真47

９月12日夜中の２時前に到着。村人が朝３時にはスカワナを出発するから、と言っていたが、まだほとんどの者が寝ていた。それでも昨夜のうちに造られた供物や故人の魂の入る場所としてのランタサンRantasanの中にはケペンと紐とダップダップが入れられ、電燈の下、白い幕で囲まれて置かれていた（写真48）。結局出発したのは５時前、ゴア・ラワーの海岸に着いたのは６時40分であった。先ず最初に行われたのは、供物を並べる事と、ランタサンの中に用意されてあったケペンと紐とダップダップをそれぞれ取り出し、ケペンを砂地に３度トントンと軽く叩く（写真49）。海辺の砂は魂が帰って来たものとも看做されている故に、ダップダップの葉に少し砂を入れ、「魂を連れて帰るよ」といった行為をする。そしてケペン、紐の束、ダップダップを一つにしてランタサンの中に戻す（写真50）。しかし参加者の中には、打ち寄せる波が死者の魂の到来を告げるものとも考えられているので、波打ち際まで行って、打ち寄せる波にケペンを浸す者もいる（写真51）。この時の行動はバユン・グデとは違う。バユン・グデにおいては一つのランタサンもどきものに参加者の故人たちの魂がすべて入り、それを各家族が持ち寄ったランタサンの上に置くことによって故人の霊が各家族に帰って来たと考えられてきた。海辺で鳥を飛ばすことは他のグループも行っていたが、ここで使われたのは黒いアヒルである。バユン・グデでは、黒い鳥の頭が刎ねられた。しかし、そういったことはここではない。供物が海に投げ捨てられた後、一行は、ゴア・ラワーへ。そのプロセスでの御詠歌もどきものもない（海岸での儀式の中では見られた）。寺院に入った後の儀式は、供物、聖水、プダンドーの声、聖水を３度飲み、米粒を額に付ける。いつも通りの流れだ。

写真48

写真49

写真50

写真51

そして、ブサキに向けて出発である。ダラム・プリーを出発点として、約10の寺院を回り、その都度同様の祈りを捧げ、最後はプラ・ププタンであった。この寺は、ブサキの中でもっ

とも素朴な形をしているもので、布に包まれたリンガがその祭壇に置かれていた。

ブサキの参詣を終えた時には、すでに６時20分になっていた。そして、一路スカワナに向けて出発。しかし、プニュリサンに立ち寄り、導師たるクバヤンを待つこと１時間。その間に近くの店で腹ごしらえをする者もいたが、ここでの儀式は８時半になっていた。やることは同様である。その後、一行はスカワナのバリ・アグンへ。

バリ・アグンへはクバヤンも一緒である。注目点はここだった。クバヤンの祈りによってバリ・アグンの神の御利益をランタサンに取り込むと同時に聖水でこれをしっかりと浄める(写真52)。村落の中心的寺としてのバリ・アグンにおけるこの動きは、個人の前にクラン有り、そして同時に村落というより大きな集合体にかれらの拠り所があったと捉えてよいのではないか。

写真52

そして、最後は、クランの寺に設えられてあるヤンに入る儀式である。ここではバリアンによるかなり大きな声を出しての祈り。正にヤン（Yan）――（写真53）――に帰って来たのである。13人の故人の霊は彼ら以前の故人の霊ともども一つとなって親族の近くで、永遠のクムラン（先祖霊）の一人として鎮座することになったのである。しかしながら､それぞれの家にあるのはクムランであって、ヤンではない。それに対しバユン・グデにおいては各個人の家にヤンがあり、クランでのヤンが家族単位へと転移しているのである。このことをどのように考えればいいのか。残された課題である

写真53

さらに、ヤンが２つの部屋に分かれているが、これは新しい方式の導入である。伝統的なものと新方式が混在しているために、要注意なのである。

Ⅲ．むすびにかえて

バリの儀式は、戦後、特に1970年ごろよりパリサダの一元化政策によって各地の伝統的な儀式が廃れていった。このことは、バリ・アガの諸村においても、程度の差こそあれ、起こって来たことである。一度や二度見ただけではその区別はつかない。一言でいえば、今まで行われなかった新方式が次第に導入され、従来の伝統的な方式と混在しているのである。それだけに、判別にはより詳しいバリ人より伺うしかない。多くの人の解説や助言を頂きながら、その差異から何をくみ取ることが出来るのか。M. エリアーデ[(6)]やレヴィー・ストロースの諸論などを通して儀式の一齣一齣に如何なる意味が存するのか。このことを心がけながら参与観察に勤しんだ次第である。

今回は、既にみたバユン・グデにおける一連の儀式が念頭にあったので、スカワナとの違いを意識的に観察して来た。日数の差異などは、大きな問題にはならないが、共同体としての視点からいえば、二つの村落になにがしかの特徴は指摘できよう。

第一点は、両村の儀式への関わり方が、ともにクランを軸とはしているものの、程度の問題が幾分出てこよう。

バユン・グデにおけるナベンは、筆者の調査時12家族であった。家で用意された供物およびアドゥガンが先ず持ち込まれたのは、バリ・アグンであり、アドゥガンは一つしか作られていない。魂の入るシンボルは分化されていないのである。換言すれば、アドゥガンは体も魂も一体化したものなのだ。そして、クランの中のかなりの人が同一クランの家族の儀式に参加はするが、共同ではやらないということである。このバリ・アグンの段階までは全員参加であるが、その後の聖なる場所での儀式では、儀式が終わるまで大人の男は立ち入らなかった（儀式が終わった後で幾分重そうなものを取りに来はしたが）。そして、墓地に供物を運んだのは大人の男および少年のみで、墓地での儀式には女性は誰ひとり参加しなかったのである。また、ここでは、ワダーは１台も使われなかった。

これに対し、スカワナの10のクランは最後まで、墓地での儀式をも含めて全員参加である。クランとしての活動が３日間続いたが、それぞれの日の課題が明確になっていた。換言すれば、彼らの儀式が形式化されてきたということでもあるが、そこにバリ・ヒンドゥー様式がかなり入って来たことは否めない。それだけでなく、男女の違いや年齢の差などによる役割分化がかなり崩れていることは、外部からの影響がかなり大きいと言わざるを得ない。

第二点は、バユン・グデにおいては、ローラスではナベンの時の12家族が３家族に減っていたが、スカワナでは全クランの参加であった。バユン･グデにおけるマンクーやウールン･デサ､特に後者の妻達には他の女性が関われない特殊な仕事が割り当てられていたのである。スカワナではこのことは全く思念されていない。つまり、特定の地位と役割が明確に区分されているのはバユン・グデの方なのである。

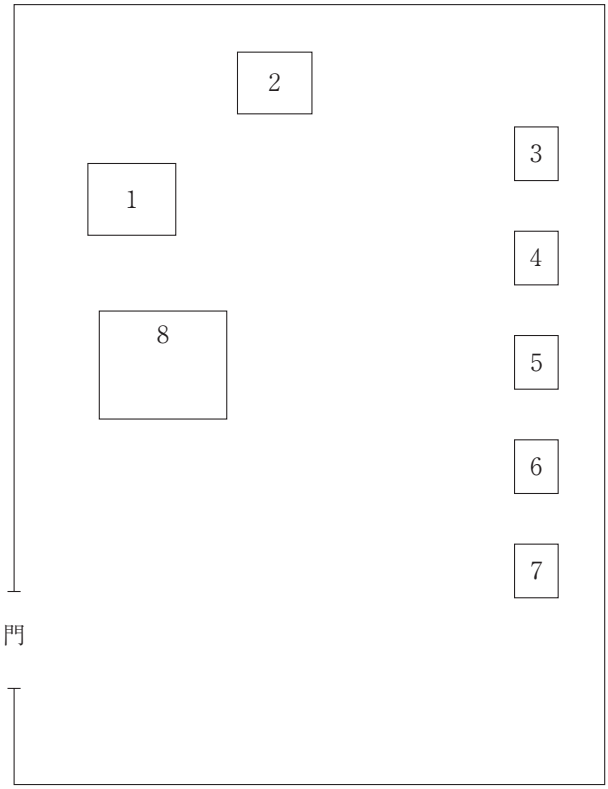
第３点は、スカワナではマンクーの存在がどこにもない、ということである。つまり、スカワナではクバヤンという宗教上のリーダーが儀式に関与するものの、それはスカワナ村およびプニュリサンだけであり、ゴア・ラワーやブサキにまではいかない。そこに行くのはバリアンなのである。クバヤンが高齢であることが大きな要因と考えられるが、そればかりとは考えられない。つまりバリアンとは、通常マンクーの出現以前の、より呪術性を帯びた存在であるが、バユン･グデでは女性のバリアンが聖なる場所で出てきただけである。言わば、宗教的指導者の視点を考慮するならば、スカワナはバユン・グデより古い形式を維持しているが、クラマ・デサの地位に依る機能分化の形式が崩れてきたことが、既述した通り、外部からの影響を受け入れやすくしてしまった。ちなみに、スカワナにおいては村外の者との結婚に対してなんらの規制もなく、かなり古くから通婚圏の拡大が見られたということを付記しておきたい。

第４点として、ムンダック・ヤンの儀式での違いである。一言でいえば、巡る寺院の数からして、かなりの違いがある。特にブサキ寺院におけるこの方式は、果してスカワナの人たちがかなり古くから行ってきたのか。いささか疑問である。これに対し、バユン・グデの場

合、ムンダック・ヤンの最後のところがティルタ・ウンプルで、その後は村に帰り、クランの寺で儀式をすることによって故人の魂は各家のヤンに戻るのであった[7]。

今ひとつ指摘しておきたい。それは、サンガー・スリヤー（太陽神）がスカワナにおいては公然と、しかも最も重要な神として現れているという点である。太陽神の位置づけに関してエリアーデはかなり多くの事例を挙げながら、至上神化した太陽神や至上神の分身としての太陽神あるいは特殊機能をもった専門化した太陽神等を挙げているが、スカワナにおけるこの太陽神は如何なる位置づけがなされるのであろうか。ちなみにスカワナにおけるクランの寺の配置図と個人の家のサンガーの配置図を示すと、概ね以下のようになる。

図. クランのカウィタンの配置図



1. Piasan
2. Sriya
3. Kemelan
4. Udongsari
5. Masemading
6. Sebanahl
7. Rohuha（polisy）
8. 供物台

見ての如く、カウィタンの中心的位置にあるのは太陽神の祭壇である。そこに併せてクムランの祭壇がある。他は守護神的存在である。ところがこのカウィタンの横に今ひとつの空間が設えられてあるのである。それがヤンとイブ・カウィタンである（家によっては、カウィタンの前にヤンyan がある）。つまり、死者の魂の行きつく先は、このヤンであるが、カウィタンの中の一つとして設置されるということは、死者の霊がただ単に先祖霊の一つになったというのではなく、クランの神のひとりになるということを意味する。またイブ・カウ

ィタンの存在は、母系制と何か関係があるのかもしれないが、今後の課題である。

さらに、各家族の屋敷の一角に、ダップダップと竹で作られたサンガーが見られる。結婚を機に造られるこのサンガーは３つに分かれているが、村人の中には、左端はスリヤーの神で、真ん中と左端はクムラン・サンガーだという者がいたかと思えば、全てがクムラン・サンガーだという者ありで、未だ判然としない。しかし、恐らく後者の説が妥当であろう。これもまた今後の課題である。

このようにナベンからムンダック・ヤンに至るプロセスが、同じバリ・アガ村と言われている両村とは言え、共同体としての特質やクランの一員としての関わり方など、細部においてはかなり差異が見られた。この儀式に関する限りバユン・グデがクランを重視しつつも家族へとシフトしているのに対し、スカワナはクラン中心的であった。にも拘らず、村落の開放性はスカワナにおいてより顕著である。家族中心の方が単純化され、クラン単位の方が複雑になっているのは如何なる要因によってなのか、改めて考察しなければならないだろう。

最後にバリ・アガ村の代表的村落としてテンガナンのケースについて触れておこう。ここでは、故人の魂が各家のクムランに帰って来るまでに以下のようなプロセスを辿る。

午前中に死ぬと夜までに、午後に死ぬと翌日埋葬（Nganam）されるが、同じ日にナベンが行われる。その３日後にヌラハンNgulahanが行われ、Muhun（Rgoras）、Nebus（Mendak Yan）と続き、家のクムランに帰って来るというものである。ただし、筆者は10年バリ通いをしているが、そのチャンスを未だつかんでいない。

註

(1) 10のバンジャールとは以下の通りである。

1. Banjar Kaja
2. Banjar Kelod
3. Banjar Kauh
4. Banjar Jero
5. Banjar Empatan
6. Banjar Tanah Dehe
7. Banjar Lempah
8. Banjar Kute Dalem
9. Banjar Pahetan
10. Banjar Lateng

(2) 拙著「報告３題　バリ･アガ研究」『就実論叢』（第37号、2008年）の第２報告「バユン・グデにおけるナベン、ローラス、ムンダック・ヤングの儀式」（103~108頁）。

(3) バリアンに関しては、すでにゴリスは３つの類型を提示している。すなわち、呪術師、医者、そしてプマンクーに由来した人間である。（cf.Dr. R. GORIS,BALI ATLAS

KEBDAJAN,*CULT AND CUSTOMS*,CULTURGESCHIEDENIS IN BEELD,published by the Government of the Republic of Indonesia,p.198.

(4) M.エリアーデ著、久米博訳『太陽と天空神』（エリアーデ著作集　Ⅰ）（せりか書房、1974年）、220～221頁。

(5) シンガラジャの西方30キロのところにあるプダワ村では、死後40日たつと、マパガット Mapegat という儀式が行われる。これは、死者の魂と体が分けられる儀式である。
また、プダワ村の教師スクラタ氏によれば、1960年まではナンキットの時ブンカラ川での儀式で帰って来た故人の魂は、プラデサの裏のナババン・クンドゥッフ　Nababang Kunduh（nabaは自由にするの意味、Kunduhは魂のシンボルのことである）で儀式をした後、バリ・アグンに行き、各家のHyang（Yanに同じ）に入るというものであったが、この60年代から70年代にかけてクランのパイポンが、魂がヤンに戻るまでの過程で入れられるようになった。恐らくは、パリサダの影響と考えられる。

(6) M.エリアーデ、前掲訳書の第３章「太陽と太陽崇拝」は参考になる。バリ・アガ研究だけでなく、バリ・ヒンドゥーについて考察する場合にも役に立つ。バリ・ヒンドゥーの家に行くと多くのサンガーがあるのにスリヤ―のサンガーがない場合がある。しかし、彼らは、スリヤーはすべてのサンガーの背後にいるという。つまりは、かれらの意識から除かれたわけではないが、エリアーデ的にいえば、隠れた神として位置づけられているということであろう。また、チャンディ・ダサのブグブグ村（バリ・アガ村のひとつ）では、ほとんど各家にスリヤー・サンガーはある。

(7) かつて筆者がバユン・グデの調査をしたときは、ティルタ・ウンプルの後は帰るだけで何もないと村人は言っていたが、スカワナの調査をしているうちに疑問に思い、再度質問してみると、やはりクランへの参詣が組み込まれていたことが判明した次第である。